

Hamlet に於る ‘seem’ が現すもの

友 清 蓉 子

Hamlet は、隠された真実を抱えて幕があがる。Claudius の犯罪はすでに為されているが、事の真相は明らかにされておらず、Hamlet と Claudius は互いに相手の様子を窺い、漠とした疑惑と不安と苛立ちに悩んでいる。どちらの心の内も決して明かされないから、互いに外から見るところで相手を判断するしか方法が無い。‘seem’ という言葉はそういう手探りの状態を観客に伝えてくれる。

華やかな宮廷の様子とは対照的に、うち沈んだ Hamlet は父親の死の悲しみを表わす喪服を身にまとい、独り浮かぬ顔つきをして登場する。Claudius はもとより、母親 Gertrude にもその様子は気にかかる。

Queen.

If it be,

Why seems it so particular with thee?

(I. ii. 74-75) (以降下線筆者)

「生命あるものは必ず死ぬ」という事実は ‘common’ であるが、Hamlet にとって ‘particular’ であるように見えているのは父親の死である。それにしても、これに続く Hamlet の台詞の激しさはどこから来るのであろうか。

Ham. Seems. madam! Nay, it is: I know not seems.

(I. ii. 76)

Gertrude の使った ‘seems’ にそれほど毒があるとは思えない。父親の死を悲しむ Hamlet の心を疑っている訳ではないのだから。事実、

‘particular’に見えることと、Hamletにとって‘particular’であることとは完全に一致する。Hamletの過剰とも思える反応は、‘seeming virtuous’(I. v. 46)であった母親に向けられた怒りや、そういう母親の使う‘seem’という語によって自分が規定されることへの反撥から来ている。‘seem’という語は、外から見えるものの奥にある事実の存在が前提として意識されているが、そう見える事と、その奥にある事実が無理なく一致する場合と、全くくい違う場合とがある。この‘seem’の持つ運用上の二面性が、この場の母親と息子のやり取りに巧みに使われて、二人の関係を観客に初めて明らかにしている。

あれほど立派だった Hamlet 王にこよなく愛されて、夫に対する愛情は時と共に深くなっていくように見えたのに、夫が亡くなってわずかひと月で、夫とは似ても似つかぬその弟と結婚してしまった。夫の愛を裏切り、息子の信頼を裏切った Gertrude は、以前 ‘virtuous’に見えていた分だけ余計に Hamlet を嘆かせている。

Hamlet の気を塞いでいる原因には、父王の死に伴って生じた国内の諸々の変化もあげられる。それらの変化が、Hamlet の意に反して、好ましい状況とはいえない国の様子をつくり出していると、Hamlet には思えてならない。

Ham.

.....

How weary, stale, flat and unprofitable

Seem to me all the uses of this world!

(I. ii. 133-134)

Claudius が治める王国の世俗的な営みに対する嫌悪の表出である。Hamlet にとってそう見えることが、その奥に隠された事実の源を発することが解るのはまだ後になってからであるが Hamlet は父王 Hamlet の治世のころと、現王 Claudius の治世の様子の違いを敏感に感じとって、現状に納得がいかないでいる。しかし、だからといって、何をする事でも

きない。

こういう閉塞状態にあった Hamlet に、行動の糸口を与えてくれたのが Ghost であった。Hamlet の母親に対する不満、叔父に対する疑惑を、Ghost は Hamlet が思っていた通りの言葉で語ってくれる。

Ghost.

.....

The serpent that did sting thy father's life

Now wears his crown.

Ham.

O my prophetic soul!

My uncle!

Ghost. Ay, that incestuous, that adulterate beast,

With witchcraft of his wits, with traitorous gifts —

O wicked wit and gifts, that have the power

So to seduce! — won to his shameful lust

The will of my most seeming virtuous queen.

(I. v. 38-46)

父親を殺した犯人が Claudius であると知らされた Hamlet の言葉には、閉じ込められていた暗い情熱が出口を与えられて躍り出したような勢いと、喜びにも似た響きがある。

父親の命を奪い、母親を穢し、王位を奪った Claudius に対する感情は、しかし、Ghost が去ったあとの Hamlet の独り言で不思議な転調をみせる。'one may smile, and smile and be a villain;' (I. v. 108) 巧言令色によって身を保つ Claudius のみせかけ 'seem' と正体 'be' との違いに対する憤りが Hamlet の心を占めているのは確かである。

吹く風が妻の顔に強くあたるのでさえ許さない (I. ii. 141-142) ほどに愛情深かった夫の死から、その弟との再婚までの期間のあまりの短かさと、すぐれた人物であった前夫に比べれば、すべてに劣る新しい夫に連れ添う母親の、外見 'seem' と内味 'be' の落差は、息子の Hamlet を苦しめてきた。Ghost の言葉は、Hamlet のそういう気持を代弁しているかの

ようである。「本物の‘virtue’ならば、たとえ邪淫が天上の姿を借りて誘惑しようとも心を動かされたりはしない」(I. v. 54) と。‘seeming virtuous’の実体は、‘virtue’とは正反対の‘lust’に他ならなかった(55-57) と。

一幕の終りまでに、Hamlet は確かめなければならない事実のありかを知った。漠とした疑いでしかなかったものが、Ghost によって言語化されたからである。言葉によって具象化はされたが、相手が得体の知れない亡霊では確証はとれない。幕の始めでは自分に対して‘seem’という言葉が使われることを嫌悪した Hamlet が、一幕の最後では、事の真実を探るために、‘antic disposition’ (I. v. 172) というみせかけ‘seem’を積極的に装って自らの手段とすることを明らかにしている。

父王の死と、それに続く母親の叔父との再婚といった出来事が生じるまでは、Hamlet の「世界」は、破綻のない、‘seem’と‘be’がぴったり重ね合わさった状態、‘seem’を意識することさえないような状態にあった。‘out of joint’ (I. v. 189) してしまったのは‘The time’だけではない。Hamlet にとっては‘seem’の世界と、‘be’の世界も又、ずれてしまった(‘out of joint’)のである。あれほど‘particular’であることにこだわった Hamlet が、同じ場のわずか数行後では‘Frailty, thy name is woman’ (146) と言い切っていて、所謂「一般化の傾向」をみせている。どの‘woman’も同じように‘frail’と見える、そういう風にしか見えなくなっている Hamlet の心の状態はあまり良いものではない。ずれてしまった‘time’の‘joint’を元にもどすことは、即ち、Hamlet 自身の「世界」を元にもどすことになるはずである。

「毒を以て毒を制す」の言葉通り、相手側のみせかけ‘seem’に隠された真実‘be’に至るために、‘antic disposition’を装うことを Hamlet が友人に打ち開けた次の場の二幕一場では、Polonius がパリに居る息子の Laertes の行状を探るための手段を使者に講じている。その方法は、

結局 'Your bait of falsehood take this carp of truth;' (II. i. 62) であって、これも又、みせかけ 'seem' を装って、真実 'be' に至ろうとするもので、Hamlet と、Polonius を含む Claudius の二つの力が全く同じ方法で対決する plot の展開を予想させている。

Hamlet の 'antic disposition' は、相手の出方を誘うように仕掛けられ、Hamlet が 'antic disposition' を装った正にその時から plot が動き始める。'antic disposition' を装う Hamlet は Ophelia のもとを訪れる。尋常でない Hamlet の様子に驚いて、Ophelia は父親 Polonius にその事を話すだろう。忠臣 Polonius は Claudius に報告しないはずはない。その後 Claudius がどう出るか。

一方、Claudius の方は、外見上も、精神状態も以前とはすっかり変わってしまった 'nor th'exterior nor the inward man Resembles that it was.' (II. ii. 6-7) Hamlet の様子 'tarnsformation' (II. ii. 5) に疑問を抱き、Hamlet の幼な友達である Rosencrantz と Guildenstern を呼びよせ、友人が Hamlet を訪ねるというみせかけ 'seem' の手段を使って、Hamlet を探らせようとする。

Ophelia の話を聞いた Polonius は、Hamlet の 'antic disposition' の原因を Ophelia に対する失恋である 'mad for thy (Ophelia's) love' (II. i. 85) と考える。狂気を装って書かれた Hamlet の Ophelia に対する恋文は、Polonius に、恋故の乱心の疑いをいよいよ強めさせた。Hamlet の意識的なみせかけ 'seem' の手段で Polonius は思い込みを強め、仕掛けられたみせかけの正体を見抜くことができない。

さすがに Claudius は、Polonius の考えには半信半疑で、これを納得させるために、Polonius は、Ophelia を Hamlet の前に放つことを提案する。Claudius 側から仕掛けられる第二のみせかけ 'bait of falsehood' である。

友人の何気ない訪問という形で Hamlet の秘密を探ろうとした

Rosencrantz と Guildenstern は、逆に Hamlet から Claudius の使者であることを見抜かれて (II. ii. 290), その試みに失敗する。探りを入れられた Hamlet の方は、Claudius の正体の怪しさをいよいよ確かなものを感じる。

みせかけに惑わされるどころか、相手が仕掛けてきた 'seem' を装う策略から、逆に相手の動きを読み取る Hamlet に対して、Polonius がそうであったように、Rosencrantz と Guildenstern が自分達の思い込みで Hamlet を理解しようとしているのは対照的である。二人は Hamlet の実像を見抜けず、自分達の尺度で Hamlet を計り、結果としては自分達の心を Hamlet の上に映した。Hamlet の心を占めているのは 'ambition' (II. ii. 256) ではないかと。

そういう二人に Hamlet は次のように語って聞かせる。まるで見る者の状態によって見えるものがどう異なるかを教えでもするかのよう。

Ham.

this goodly frame, the earth, seems to me a sterile promontory; this most excellent canopy the air, look you, this brave o'erhanging firmament, this majestic roof fretted with golden fire — why, it appeareth no other thing to me than a foul and pestilent congregation of vapours. What a piece of work is a man! How noble in reason! how infinite in faculties! in form and moving, how express and admirable! in action, how like an angel! in apprehension, how like a god! the beauty of the world! the paragon of animals! And yet, to me, what is this quintessence of dust?

(II. ii. 295-307)

かつては、美しいもの善きものであったものが、今では醜いもの悪きものになってしまったと Hamlet は感じている。Hamlet にとってそう思えるものとその実体の関係には一つの特徴があるが、それは、思えるも

のの内容がある時を境に激しい変化を見せたのに対して、対象そのものは全く変化していないということである。

地球 'the earth', 大空 'firmament', 広い意味での人間 'a man' は、人間の善悪等の判断を超えていて、それがどう見えるかは、見る者の心次第でしかない。Hamlet はただ、昔はどんなに幸せであったか、そして現在はどんなに心楽しまない気持であるかをそういう対象に映して語っているにすぎない。

二幕の終りまでの間、Hamlet にどれほど共感を覚えようと、観客が Claudius に対する判断を留保しても誤りとは言えない。三幕一場の所謂 nunnery scene の直前で Claudius に与えられた [Aside] によって初めて観客は Hamlet の抱く Claudius に対する疑惑の正しさと、Ghost の言葉の確かさを知るからである。

Pol.

..... with devotion's visage

And pious action we do sugar o'er

The devil himself.

King. [Aside] O, 'tis too true!

How smart a lash that speech doth give my conscience!

The harlot's cheek, beautied with plast'ring art,

Is not more ugly to the thing that helps it

Than is my deed to my most painted word.

O heavy burden!

(III. i. 47-54)

醜い行為 'deed' を巧みな言葉 'word' で隠してごまかし続けてきた Claudius にとっては、みせかけ 'seem' は常に真実 'be' と全く異なるもの、自分の醜い真実 'be' を助けて 'beautify' してくれるものである。自らが意識的に仮面を被りつつけているのであれば、Hamlet の 'antic disposition' をみせかけと見抜き 'he puts on this confusion' (III. i. 2)

執拗に真実のありかを求めるのも当然であろう。

nunnery scene の Ophelia の様子に不自然さを感じ、彼女を Claudius の囷と見抜いた Hamlet の第一声は ‘Ha, ha! Are you honest⁽¹⁾?’ (III. i. 103) であった。‘seem’ の世界と、‘be’ の世界を一致させようとする精神的な働きを honesty と定義できようか。‘honest’ あるいは、‘honesty’ という語は、この場の Ophelia 以外の人物に対しても Hamlet によって、まるで相手に「手の内は解っているよ」とでも言いたげな使い方をされている。Ophelia を放して Hamlet の狂気の原因を探る相談をしたすぐあと、本を読んでいる Hamlet に近づいて話しかける Polonius に三度、(II. ii. 175, 177, 202), 自分達の立場をうっかり口にした形で ‘honest’ (II. ii. 236) という語を使った Rosencrantz に一度、(II. ii. 268), nunnery scene の Ophelia に六度 (III. i. 103, 107, 108, 112, 113, 123) である。相手のみせかけ ‘seem’ と真実 ‘be’ の違いをたまたま衝いた無意識の言葉というより、相手を手玉にとってからかう余裕を感じさせる意識的な言葉であり、そう (honest) であって欲しいという Hamlet の願いのこもった言葉でもある。

Ophelia は、最初に Hamlet が使った Claudius を揺さぶるための道具であったから、彼女が相手側からも利用されるかもしれないという懸念は Hamlet にはとうにあっただろう。Ophelia は囷で、Polonius か Claudius、あるいはその両方が立ち聞きしているのではないかと疑う Hamlet の口から出る言葉は、隠れている Claudius に身の危険を感じさせるに充分である。かなりの程度まで Claudius の犯した罪に対する疑惑を確信している Hamlet にとっては、ここで与えられたチャンスを利用して、立ち聞きしているに違いない Claudius を刺激して次の段階に駒を進めたいと思っても不思議ではない。

この場で Hamlet が Ophelia に語る最後の台詞

Ham. I have heard of your paintings too, well enough ;
God hath given you one face, and you make yourselves
another. You jig and amble, and you lisp, and nickname
God's creatures, and make your wantonness your ignorance.

.....

(III. i. 142-147)

は、みせかけ 'seem' の手段で Hamlet を探っている Claudius に、手の内は解っていると暗にほのめかすためのものであるが、真実 'be' を偽るみせかけ 'seem' に対する嫌悪の表現でもある。そして、そのことが私を狂気に追いやった 'it hath made me mad.' (148) という Hamlet の言葉には、彼を苦しめているものが他ならぬそれであるという本音の響きがある。

一方 Claudius は、Polonius の恋故の乱心説がとうてい信じ難いものであり、Hamlet の矛先が自分に向けられていることを確め得て (III. i. 162), Ophelia を使った作戦は一応の成功を納めた。Hamlet の言葉に危険なものを感じて、Claudius は次の策を講じなければならないと考える。こうして生まれたのが Hamlet の英国派遣の計画であった。

Claudius と一緒に同じ場面を見聞きしたにもかかわらず、Polonius は恋故の乱心説を捨てきれないで、更らに Gertrude と Hamlet を会わせてこれを立聴きすることを提案する。

Hamlet が期待した通りに二人は駒を進めようとしている。しかし、Hamlet としてはあまり早急に事が運びすぎて、真実を確かめるという目的が達せられない内に殺されでもしたのでは仕方がない。Hamlet の側から仕掛けられる第二の計画は、慎重に準備し、確実に成功させねばならない。

Hamlet 王殺害の場面を再現して見せる 'the Murder of Gonzago' の上演は、仕掛けられた側に何のやましさも無ければ何事もなく看過されてしまうような試みである。芝居という、現実を写すみせかけ 'seem'

の力を借りて、Claudius のみせかけ ‘seem’ の裏に隠された真実 ‘be’ を表にひきずり出そうとする。さわりの部分に Claudius がどう反応するか、Horatio の助けを借りて誤りのない判断を下さなければならない。

Ham. Give him heedful note;
 For I mine eyes will rivet to his face,
 And, after, we will both our judgements join
 In censure of his seeming.

(III. ii. 82-85)

芝居の途中で Claudius がどんな反応をみせようと、それはやはり ‘seeming’ でしかない。しかし、Claudius が、事ここに至って Hamlet の予期した通りの反応をみせれば、もはやそれは Ghost の言葉の確かさを示めす証以外の何物でもない。

dumb-show の中で使われている二度の ‘seem’ (‘seeming to condole’, ‘seems harsh awhile’) は、自分で殺しておきながら King の死を悼む Poisoner と、結局その愛を受け入れてしまう Queen の心情が、みせかけのものであることを示めしている。

思いがけない方法で不意を衝かれた Claudius は、まるで隠しつづけてきた真実 ‘be’ が彼のみせかけ ‘seem’ の皮を破って勝手に跳び出そうとしたかのような動揺をみせる。Hamlet の作戦は狙った通りの効果をあげたのである。Horatio と判断の一致をみた Hamlet は、父王 Hamlet の姿を装う (‘seem’) 悪魔 (‘be’) かもしれないという疑いを捨てきれずにいた Ghost の言葉を今や全面的に信じることができるようになった。

劇の上演によって Hamlet は Claudius の罪を確信したが、同様に Claudius はそれまでの Hamlet の言動の因って来たところを知った。誰一人知るはずのない Hamlet 王殺害の秘密をどういう訳か Hamlet が知っていることを Claudius は知ったのである。こうして ‘mouse trap’ はその目的を果たして Hamlet を喜ばせたが、Claudius には Hamlet

を英国へ遣る新たな口実を与えた。

使者として Gertrude の伝言を Hamlet に伝える Rosencrantz と Guildenstern が再び Hamlet の心の秘密を探ろうとする。腹を立てた Hamlet は次のように言って二人を退散させる。

Ham. You would play upon me; you would seem to know my stops; you would pluck out the heart of my mystery; you would sound me from my lowest note to the top of my compass;

(III. iii. 355-358)

もちろん二人は Hamlet の ‘stops’ を知らない。相手の ‘stops’ を知るためには相当の情報が必要であるが、Hamlet が Claudius を知り、Claudius が Hamlet を知っているようには Rosencrantz と Guildenstern は Hamlet を知らない。敵対関係にある二人からみれば、Rosencrantz も Guildenstern も完全な部外者である。部外者という点では続いて Hamlet を Gertrude の使いで呼びに来た Polonius も同様であって、この三人は Hamlet の周りにうるさくつきまといながら何一つ真実を知らずに間もなく消えていく。

公の場で脅かされた Claudius は国民の安全のために狂った Hamlet を英国へ遣るのだというみせかけの口実 ‘seem’ で Rosencrantz と Guildenstern を納得させて、彼らに Hamlet に同行することを進んで引き受けさせる。

ここまでくれば Claudius の側からもこれ以上 Hamlet を探る必要はない訳であるが、Claudius 王を立腹させた Hamlet を叱るというみせかけ ‘seem’ の裏に、Polonius をスパイとして忍ばせ Hamlet の秘密を探るという企てが、事情の変化を知らない Polonius によって計画通り実行に移されようとしている。

今や互いに相手の正体を知った二人は、それぞれ独り想いにふける。一

人は今こそ父親の仇を討つに十分な時を得た ‘Now could I drink hot blood, And do such bitter business as the day Would quake to look on.’ (III. ii. 380-382) と復讐に心を満たし、もう一人は自分自身にさえ隠し続けてきた罪を Hamlet によってたたき起こされて、良心の呵責と罪の意識に苛まれている。(III. iii)

そういう二人が二人きりで遭遇しながら完全にすれちがいに終るのが Claudius の祈りの場である。Claudius は自分の想いに気をとられて警戒心を忘れ Hamlet がそばに来ては気がつかない。Hamlet は絶好の復讐の機会を得ながら Claudius の祈りの姿に欺かれて機を逸してしまう。Claudius は確かに祈ろうとした。跪いて、指を組み、祈りの言葉を呟く。しかし実際は祈ることができなかった。‘My words fly up, my thoughts remain below. Words without thoughts never to heaven go.’ (III. iii. 97-98) このみせかけ ‘seem’ を意図しない「みせかけ」に Hamlet は騙されたのである。一方は祈りの形によって命が救われたことを知らず、もう一方は祈りの形に騙されたことを知らず、それぞれ別の方向へ別れていく。みせかけ ‘seem’ の手段によって相手を探り、相手のみせかけ ‘seem’ の手段によって探られながらも逆に相手の動きを読んできた二人の、これまでとは全く異質のこの出会いは印象的である。

Hamlet はそのまま母親 Gertrude の部屋へ向う。Polonius を壁掛の蔭に隠して会見は始まったが、Claudius 王に対する無礼をたしなめる母親と、全く非を感じていない息子とでは話が巧く運ぶはずがない。

長い間くすぶり続けてきた母親に対する不満を率直に語ろうとすると Hamlet は思わず真剣になる。凄みをおびた Hamlet の様子に声をあげた Gertrude を助けようとして、Polonius は誰と確められもせずに、Hamlet によって殺される。

自分の思い込みの正しさを立証しようとして自ら企てたみせかけ ‘seem’ の会見の途中で Polonius は自分がかかわりあっている事の真実

は何一つ知らずに死んだ。

Claudius の側から仕掛けられた第三の謀り事は、こうして思いがけない展開をみせた。Claudius は Polonius を失ったが、その事で Hamlet の英国派遣を早急に容易に行なえるようになった。一方 Hamlet は、この企てのお蔭で母親 Gertrude と二人きりでじっくり話す機会を与えられた。Hamlet を苦しめてきた母親の問題は、この場で浄化される。Gertrude は初めて Hamlet が何を考えてきたかを知り今までとは違う次元で自分自身を見つめるようになるからである。‘Thou turn’st my eyes into my very soul;’ (III. iv. 89) Hamlet の母親に対する助言には、一度裏切られた者の二度と元にはもどらない思いがこもっている。Hamlet 王の妻であった Gertrude は ‘virtuous’ と見え ‘seem’, ‘virtuous’ であった ‘be’。Claudius と再婚した Gertrude は、かつての virtue をさえ否定された。‘my most seeming virtuous queen’ (I. v. 46) と。今、Hamlet は Gertrude に助言を与えて言う。‘Assume a virtue, if you have it not.’ (III. iv. 160), ‘use almost can change the stamp of nature ...’ (168) と。

言葉という ‘dagger’ で Gertrude を刺すことによって、‘joint’ のずれていた ‘seem’ と ‘be’ の世界がもう一度重ね合わせられる可能性が生まれた。美しく、落ちついた、賢い王妃 ‘a queen, fair, sober, wise,’ (III. iv. 189) にしか二人の会話の秘密は守れない、と言う Hamlet に約束した通り、Gertrude は会見のいきさつを一切 Claudius にはもらさない。

Polonius 殺しの罪を罰するというみせかけ ‘seem’ で Hamlet を国外へ追い遣ってしまおうという Claudius の命令に、Hamlet はその意図を知りながら ‘I see a cherub that sees them.’ (IV. iii. 48) 従う。Claudius は英国王に宛てた親書で Hamlet の処刑 ‘The present death of Hamlet’ (IV. iii. 65) を命じていたのである。

Polonius の死は Ophelia の狂気と死を招き、その兄 Laertes の帰国を促した。父親の仇討ちを叫ぶ Laertes に Claudius が具体的にどう話をしたかは観客には明らかにされない。確かに剣をふるったのは Hamlet であるが、どういういきさつで Polonius がその場に隠れていなければならなかったかは、元を糺せば Claudius の最初の罪にまで遡ることになる。Claudius が良い加減にそれらしく Laertes を言いくるめたであろうことは想像に難くない。

自分が企てた最後のものになるはずであった謀り事の成功の知らせを待っていた Claudius のもとに Hamlet の帰国を知らせる手紙が届けられる。Claudius は、すぐには謀り事の失敗が信じられない。一瞬それは Hamlet の側から仕掛けられた罠かと疑ったほどである。逸る Laertes にせきたてられるように Claudius は今度こそ最後の決定的な計画をたてる。

英国への使者というみせかけ ‘seem’ の使命を帯びて航海に出た Hamlet は、胸騒ぎに助けられて Claudius の親書を手に入れ、Claudius の企みを知る。Claudius の親書とみせかけ ‘seem’ で内容を書き換えた別の親書を Rosencrantz と Guildenstern のもとに返した Hamlet は、Claudius の企てをくじいて、その使者であった二人を葬ったのであった。

偶然が重なって、一人無事に帰国した Hamlet は、自分を救ってくれたその偶然の故に少なからぬ心境の変化をみせている。

Ham. There's a divinity that shapes our ends,
Rough-hew them how we will.

(V. ii. 10-11)

これまでずっと、Hamlet は自分の感性と知性と、持てる能力のすべてを動員して Claudius と闘ってきた。人の運命を左右するものが、人間の

力の及ばぬところにもあるという認識は、正にその通りであり、かつ平穩な人生にあっては好ましいものであろう。しかし、まだ闘い終っていない Hamlet にとっては、その死を早める要因になったと言えないであろうか。

剣の試合にみせかけ 'seem' て、Hamlet を殺害しようと企む Claudius の申し出を、胸にひっかかるものがありながら 'how ill all's here about my heart' (V. ii. 205) Hamlet は承知する。'there's a special providence in the fall of a sparrow.' (V. ii. 212) と、これからどういふ運命が待ちうけていようとそれを受け容れようというつもりである。

切っ先に毒を塗った剣で Hamlet が傷つき、杯に入った真珠に仕込まれた毒で Gertrude が倒れ、取り換えられた毒の剣で Laertes が傷つき、と矢継早に事が起こる中で、初めて Claudius の正体 'be' が公の場で、共犯者であった Laertes の口から明らかにされる。Claudius はその場で Hamlet によって、自分で毒を塗った剣で刺され、自分で仕込んだ毒杯を飲まされて死ぬ。

Hamlet が死に臨んで、最後まで気にかけていたことが二つあった。一つは、自分が亡きあと国王となる者のこと。もう一つは、事の顛末を語り正しく理解されることである。

'out of joint' していた 'time' は、何とかその源を断って元にもどした。あとは王位を継承する Fortinbras が巧くやってくれるだろう。

問題は第二の点である。最後の息をひきとるまで Hamlet はくり返し(四度)この事に触れている。みせかけ 'seem' を装う謀り事の応酬は、自らの本当の姿 'be' を隠し、相手のみせかけ 'seem' の奥にある正体 'be' に迫ろうとした。Hamlet と Claudius は、互いに相手の 'seem' と 'be' のずれを意識し、同時に自分自身の 'seem' と 'be' のずれを意識した。孤独な二人の闘いは、そのままこの劇の plot の展開をなしている。事は秘かに繰り広げられてきたのだから、事情を知らない者にとっ

ては、そのどれ一つをとっても 'seem' の世界でないものはない。Horatio に託された仕事は、この 'seem' の世界を、言葉によって、限りなく 'be' の世界に近づけることであった。

Hamlet 自身の二つの世界のずれは、その元凶であった Claudius の死と共に解消した。精神の健康をとりもどした Hamlet が時さえ与えられていたらどんな名君になっていたであろうかと想像する。Fortinbras も言っている。'he was likely, had he been put on, To have prov'd most royal;' (V. ii. 389-390) と。おやすみなさい王子様。

註 引用は、*William Shakespeare The Complete Works*; ed. Peter Alexander, Collins, London 1978 による。

- (1) Ophelia に対して使われた honest は、virtuous の意味であるが、Gertrude には virtuous を使い、この場での Ophelia に honest を使うには、それなりの理由がある訳である。